



文化祭をきっかけに「多古町公民館舞踊クラブ」として昭和49年に発足。当時婦人会の会長で、このクラブの代表を務める前橋さんが、各地区から5名ずつ募り活動を始めて早35年。現在はコミュニティプラザへと拠点を移し「順乃会舞踊クラブ」と名称を変え、心から日本舞踊を楽しむメンバーで、熱心に活動しています。

毎月2回の活動日は、昼食をはさみ、ほぼ一日練習です。和服に身を包んで背筋をピンと伸ばし、足さばきも軽やかに踊るその姿は、とても若々しく優雅です。普段はなじみのある民謡や演歌など、1曲に2ヶ月近くを費やして仕上げますが、年に2回ある発表会が近づくと、何曲も同時に練習すること。そんな時は、練習日を増やしたり、先生が帰った後に居残って自主練習をしたりします。メンバーについて、発足時から講師を務める若柳順助さんは「いくつになっても元気！足腰が痛くても覚えようとする意欲がすごい」と、話します。

日本舞踊の魅力は、唄の中の人生を踊り手として生き、男女の別なく踊ることができること。踊りで使う小道具は扇

サークル CIRCLE ZUKAN 鑑

第34回 舞踊クラブ

『ゆきのかい 順乃会舞踊クラブ』

- ①活動歴 35年
- ②年齢層 60代～80代の女性
- ③活動場所 コミュニティプラザ第3研修室
- ④活動時間 毎月第2・4水曜日
10:00～15:00
- ⑤代表者 前橋しづ(まえはししづ)
- ⑥連絡先 ☎76-3632

や傘、手ぬぐいなど。中でも扇は、日常の生活道具から自然界の森羅万象に至るまで、何でも表現します。扇の持ち手は幾通りもあって、踊っている最中に扇を落としてしまうこともしばしば…。指先の動きや眼差しに小道具を融合させて、情景や心情を見ている人に思い描かせるように踊ることはとても難しく、何年踊っ

ていても日本舞踊の奥深さを感じるメンバー。ゆっくりとした動きは一見楽そうに見えますが、立ち座りの激しいものや、中腰で背筋を伸ばした体勢を維持するのはとてもハード。齢を重ねたメンバーですが、踊っているときは足腰の痛みも忘れ、無心になってしまいます。

踊りのほかに楽しみなのは、自宅から漬物などを持ち寄り、お弁当などを頼んで、おしゃべりしながら食べるお昼のひととき。踊りが好きだから、そして踊りが好きな仲間がいたから、ここまで一つのことを続ける事ができたと、メンバーは口をそろえます。長続きの秘訣は、上手に踊ろうと気構えず、楽しく踊ること!!

5月18日(日)に行われる、町舞踊連合会の発表会に向けて、メンバーは一生懸命練習に励んでいます。その晴れ姿を、ぜひ皆さん見に来てください。



編集 後記

★この季節になると毎年思うこと。それはもしかして花粉症?風邪のような症状で喉がイガイガしたり、熱っぽかったり、うっすら目頭がかゆかったり★先日風邪をひいた三女。吐き気と腹痛の彼女に添い寝をしていたら、何だか自分もだるくなってきた。風邪をうつされたのか、例年の花粉症もどきかとウトウトしたら：★突然襲ってきた吐き気と腹痛。脂汗がにじみ格闘すること30分以上。具合の悪かった三女が、心配して声を掛けてくる始末。すまないねえと思いつつ、脳裏に夕食のメニューが浮かんできた★それは私の大好物♡セグロイワシくん。生で食べたいのをグツと堪えて酢で食べているのに、彼には過去三度ほど痛い目に遭わされている私。思い起こせば前回は10年前、妊娠8カ月のときだった。しかも今回は全身じんましんのおまけ付き★何度あたたっても癒れない私に「最後はセグロに命をとられると、呆れ顔の笑顔。だけど、卒業できてもいいんだよねえ…」

受賞作品となった
平成19年10月号表紙

★県広報コンクールの写真部門(1枚写真)で「広報たこ」10月号表紙が1位になりました。また広報紙部門(町村部)では6月号が2位に。これもひとえに、紙面に登場していただいた方々をはじめ、町民の皆さんのご協力のおかげと、感謝の気持ちでいっぱいです。でも本当の広報紙審査員は専門家ではなく、1万7千人の町民の皆さん。今後も広報係では、皆さんに親しまれ、役立つ紙面づくりを心掛けていきます★カメラも使えなかった新米記者も、広報係に配属され丸3年。そろそろ卒業!?!との声もチラホラ聞こえてきますが、今後も町で緑色の『広報たこ』の名札をぶら下げた記者を見かけたら、気軽に声を掛けてください!!